

FD 実施委員会主催

**2017（平成 29）年度
全学 FD ワークショップ**

実施日：2017 年 8 月 21 日（月）・22 日（火）

場所：東京薬科大学 教育 1・5 号館



2017 FD-WS 報告書 目次

ワークショッププログラム	1	～	2
参加者名簿	3	～	4
ワークショップの様子	5	～	8
第1日目	講演会資料		(学内限り)
	グループワーク資料		(学内限り)
	Aグループ報告書		(学内限り)
	Bグループ報告書		(学内限り)
	Cグループ報告書		(学内限り)
	Dグループ報告書		(学内限り)
	Eグループ報告書		(学内限り)
	Fグループ報告書		(学内限り)
	Gグループ報告書		(学内限り)
	アンケート結果	9	～ 10

第2日目	講演会資料	(学内限り)
	グループワーク資料	(学内限り)
	Aグループ報告書	(学内限り)
	Bグループ報告書	(学内限り)
	Cグループ報告書	(学内限り)
	Dグループ報告書	(学内限り)
	Eグループ報告書	(学内限り)
	Fグループ報告書	(学内限り)
	Gグループ報告書	(学内限り)
	Hグループ報告書	(学内限り)
	Iグループ報告書	(学内限り)
	Jグループ報告書	(学内限り)
	アンケート結果	11 ~ 15
『終わりに』		16

2017（平成29）年度 全学FDワークショップ プログラム

開催日：2017年8月21日（月）、8月22日（火）

場所：教育1号館1101講義室 教育5号館1.2階

ディレクター：笹津備規 学長、太田 伸 副学長

主催：全学FD実施委員会

【1日目 8月21日（月）】

受講者：薬学部19名 生命科学部16名 事務職員8名 計43名

タスクフォース：薬学部4名 生命科学部4名 計8名

時間	内容	会場
～9:30	集合	教育1号館 1101講義室
9:30～9:35	学長挨拶	
9:35～9:45	講師紹介、趣旨説明 司会 高木教夫 FD実施委員	
9:45～11:15	講演会（講演90分（質疑応答を含む）） 「新・大学評価システムの概要（大学基準、評価体制、評価のプロセスなど）」 講師 公益財団法人 大学基準協会 大学評価・研究部 企画・調査研究系 副主幹 蔦 美和子 氏	
11:15～11:30	集合写真	
11:30～12:30	昼食	アトリウム (講師・学長・タスク等は第2会議室)
12:30～12:45	自己紹介	教育5号館 5201講義室他
12:45～16:30 (※蔦氏は13:00頃 ご退席予定)	グループワーク 「大学基準協会第3期認証評価受審に向けた自己点検・評価の実施」 司会 大野尚仁 薬学部長	
	コーヒープレイク	
	グループワーク 続き	教育5号館 2階廊下
16:30～17:30	発表（各グループ5分）、情報共有、アンケート ～第1日目終了	教育5号館 5201講義室他

【2日目 8月22日(火)】

受講者：薬学部 23名 生命科学部 18名 計 41名

タスクフォース：無し

時間	内容	会場
～9:30	集合	教育5号館 5201講義室
9:30～10:00	第1日目のアンケート結果 フィードバック	教育5号館 5201講義室
10:00～10:30	講演 「構造化アカデミック・ポートフォリオ作成の意義」 講師 東京大学 総合教育研究センター 准教授 栗田 佳代子 氏	教育5号館 5102講義室
10:30～12:00	グループワーク 1 「構造化アカデミック・ポートフォリオチャートの作成(教育)」 講師 東京大学 総合教育研究センター 准教授 栗田 佳代子 氏 東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構 アクティブラーニング部門 特任助教 吉田 壘 氏	教育5号館 5102講義室他
12:00～13:00	昼食	アトリウム
13:00～14:30	グループワーク 2 「構造化アカデミック・ポートフォリオチャートの作成(研究・サービス)」	教育5号館 5102講義室他
14:30～14:50	コーヒーブレイク	教育5号館 2階廊下
14:50～15:30	グループワーク 3 「構造化アカデミック・ポートフォリオチャートの作成(統合)と振り返り」	教育5号館 5102講義室他
15:30～16:00	グループワーク 4 「振り返り(SAPチャート作成の感想、質疑応答、まとめ)」	
16:00～16:30	集合写真、アンケート、閉会式	

以上

2017全学FDワークショップ 参加者グループ分け (1日目)

A 5202 講義室	1	小倉 健一郎	薬学部	薬物代謝安全性学	タスクフォース 高木 教夫
	2	稲葉 二郎	薬学部	薬学基礎実習教育センター	
	3	国分 秀也	薬学部	薬学実務実習教育センター	
	4	高島 由季	薬学部	製剤設計学	
	5	黒田 明平	薬学部	漢方資源応用学	
	6	田上 啓	事務職員	学生サポートセンター	
	7				

B 5203 講義室	1	長谷川 弘	薬学部	病態生理学	タスクフォース 大野 尚仁
	2	益山 光一	薬学部	薬事関係法規	
	3	三浦 典子	薬学部	薬学教育推進センター	
	4	小谷 明	薬学部	分析化学	
	5	下枝 貞彦	薬学部	臨床薬剤学	
	6	竹内 美恵	事務職員	キャリアセンター	
	7				

C 5204 講義室	1	高柳 理早	薬学部	臨床薬効解析学	タスクフォース 野口 雅久
	2	東海林 敦	薬学部	薬物生体分析学	
	3	櫻井 浩子	薬学部	生命・医療倫理学	
	4	安達 禎之	薬学部	免疫学	
	5	遠藤 朋宏	薬学部	薬学教育推進センター	
	6	黒沢 静代	事務職員	人事室	
	7				

D 5205 講義室	1	山田 純司	薬学部	総合医療薬学講座	タスクフォース 杉浦 宗敏
	2	三浦 剛	薬学部	薬化学	
	3	勝山 壮	薬学部	薬学実務実習教育センター	
	4	田村 和広	薬学部	内分泌・神経薬理学	
	5	曾我部 尚人	事務職員	学務課	
	6	山田 富美子	事務職員	薬学事務課	
	7				

E 5206 講義室	1	伊藤 久央	生命科学部	生物有機化学	タスクフォース 井上弘樹
	2	高須 昌子	生命科学部	生命物理科学	
	3	梅村 知也	生命科学部	生命分析化学	
	4	森本 高子	生命科学部	分子神経科学	
	5	萩原 明子	生命科学部	言語科学	
	6	藤川 雄太	生命科学部	分子生物化学	
	7	原田 理	事務職員	総務課	

F 5207 講義室	1	渡邊 一哉	生命科学部	生命エネルギー工学	タスクフォース 佐藤 典裕
	2	高橋 滋	生命科学部	環境応用動物学	
	3	時下 進一	生命科学部	応用微生物学	
	4	玉腰 雅忠	生命科学部	極限環境生物学	
	5	横堀 伸一	生命科学部	極限環境生物学	
	6	高妻 篤史	生命科学部	生命エネルギー工学	
	7	沼尾 嘉千	事務職員	管財課	

G 5103 講義室	1	田中 正人	生命科学部	免疫制御学	タスクフォース 渡部 琢也 浅野 謙一
	2	田中 弘文	生命科学部	細胞制御医科学	
	3	松下 暢子	生命科学部	分子生化学	
	4	福田 敏史	生命科学部	分子生化学	
	5	千葉 まこと	事務職員	生命科学事務課	
	6				
	7				

2017全学FDワークショップ 参加者グループ分け (2日目)

A 5202講義室	大野 尚仁	薬学部	免疫学
	長谷川 弘	薬学部	病態生理学
	浅野 謙一	生命科学部	免疫制御学
	玉腰 雅忠	生命科学部	極限環境生物学
B 5203講義室	稲葉 二郎	薬学部	薬学基礎実習教育センター
	東海林 敦	薬学部	薬物生体分析学
	佐藤 典裕	生命科学部	環境応用植物学
	藤川 雄太	生命科学部	分子生物化学
C 5204講義室	安達 禎之	薬学部	免疫学
	高島 由季	薬学部	製剤設計学
	伊藤 久央	生命科学部	生物有機化学
	森本 高子	生命科学部	分子神経科学
D 5205講義室	高柳 理早	薬学部	臨床薬効解析学
	益山 光一	薬学部	薬事関係法規
	高橋 滋	生命科学部	環境応用動物学
	時下 進一	生命科学部	応用微生物学
E 5206講義室	遠藤 朋宏	薬学部	薬学教育推進センター
	田村 和広	薬学部	内分泌・神経薬理学
	渡邊 一哉	生命科学部	生命エネルギー工学
	熊田 英峰	生命科学部	生命分析化学
F 5207講義室	小倉 健一郎	薬学部	薬物代謝安全性学
	国分 秀也	薬学部	薬学実務実習教育センター
	渡部 琢也	生命科学部	心血管医科学
	萩原 明子	生命科学部	言語科学
G 5103講義室	三浦 剛	薬学部	薬化学
	櫻井 浩子	薬学部	生命・医療倫理学
	福田 敏史	生命科学部	分子生化学
	横堀 伸一	生命科学部	極限環境生物学
H 5104講義室	野口 雅久	薬学部	病原微生物学
	下枝 貞彦	薬学部	臨床薬剤学
	黒田 明平	薬学部	漢方資源応用学
	松下 暢子	生命科学部	分子生化学
I 5105講義室	三浦 典子	薬学部	薬学教育推進センター
	山田 純司	薬学部	総合医療薬学講座
	小谷 明	薬学部	分析化学
	井上 弘樹	生命科学部	分子細胞生物学
J 5102講義室	渡部 伯留彦	監事	
	杉浦 宗敏	薬学部	医薬品安全管理学
	勝山 壮	薬学部	薬学実務実習教育センター
	高妻 篤史	生命科学部	生命エネルギー工学

ワークショップの様子

第1日目



開会式・講演会

講演会「新・大学評価システムの概要（大学基準、評価体制、評価のプロセスなど）」

講師：公益財団法人 大学基準協会 大学評価・研究部 企画・調査研究系 副主幹 薦 美和子 氏



講演会



グループワーク「大学基準協会第3期認証評価受審に向けた自己点検・評価の実施」

司会：大野尚仁 薬学部長



グループワーク作業



グループ発表



グループ発表

第2日目



講演会・グループワーク「構造化アカデミック・ポートフォリオチャートの作成」
講師：東京大学 総合教育研究センター 准教授 栗田 佳代子 氏
：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 特任助教 吉田 壘 氏



グループワーク



グループワーク



グループワーク



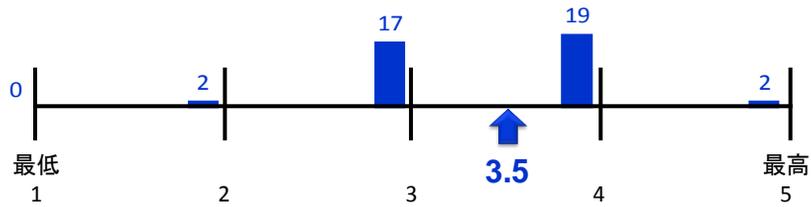
グループワーク



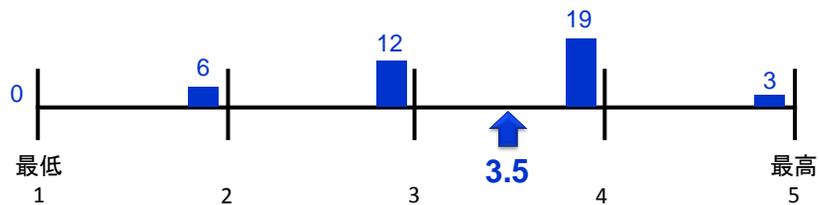
発表

第1日の評価

今日のワークショップの流れにスムーズに入りこめましたか。

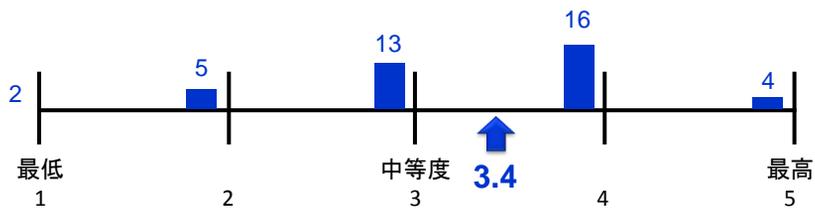


今日、あなたは討議にどの程度参加しましたか。

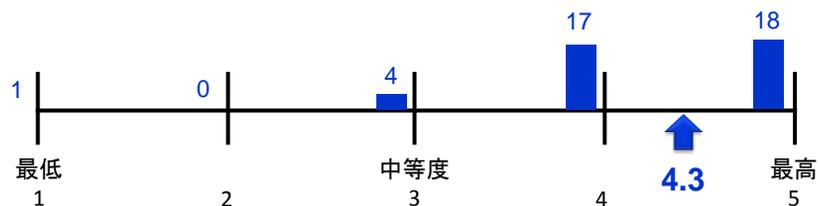


第1日の評価

今日の内容は、あなたのニーズにマッチしましたか。



今日の世話人の仕事はよかったですか。



第1日の評価(自由記述項目) ()は人数。

今日、よく理解できたことは何でしたか。

- 大学評価基準の存在と内容(3)。どのようなことが評価の対象になっているのか。
- 3つのポリシーの内容が分かった(3)。DP, CPを初めて読んだ(2)。

今日、あまり理解できなかったことは何でしたか。

- 東京薬科大の特色をどうアピールし、活用すればよいのか。
- 自己評価の根拠となる客観的資料はあるのか、どのように用意するのか(4)。
- 「新大学評価システム」にもとづく評価が本学の将来にどう影響するのか。

その他のご意見

- (他大学も含めて)過去の報告書を参考にできれば、より理解が深まったのでは。
- もう少し早く終わらせてほしい。

来年度に向けての要望・提言 ()は人数。

配布資料について

- 報告書のフォーマットは事前に送信してほしい、ワークショップ中に入力したい(昨年度からの継続)。

FDの内容について

- 若手教員向けのFDを企画しては(3)。
- 今回のように制度的なことではなく、講義の進め方・話し方のように実践的な内容を盛り込んでほしい(2)。

第6回全学FDワークショップ 2日目アンケート

講演日時:平成29年8月22日

講演場所:東京薬科大学 教育5号館 5102講義室

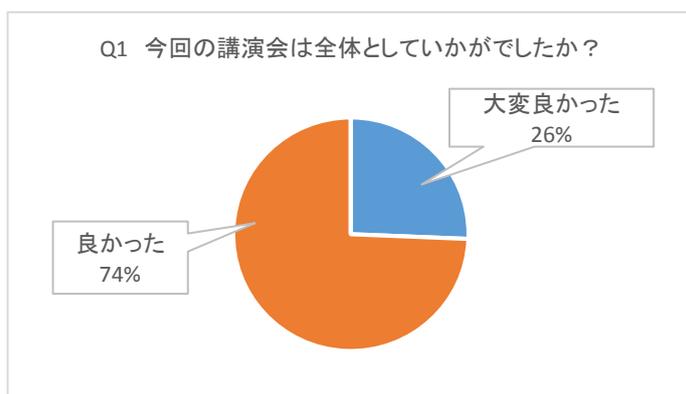
講師 :東京大学 准教授 栗田 佳代子

補助者 :東京大学 助教 吉田 壘

アンケート回収:39通

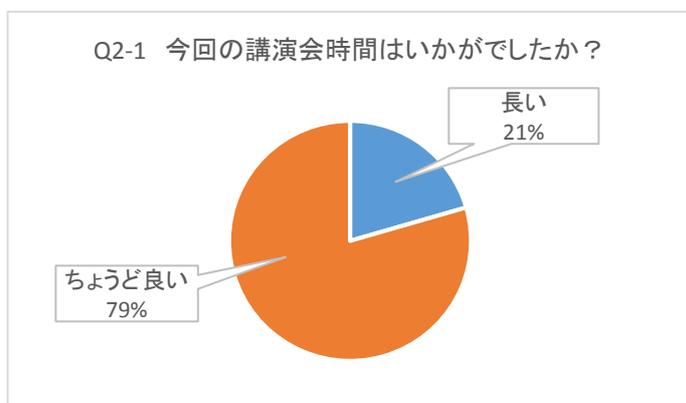
Q1 今回の講演会は全体としていかがでしたか?

- | | |
|-----------|-----------|
| ①大変良かった | 10名 (26%) |
| ②良かった | 29名 (74%) |
| ③良くなかった | 0名 (0%) |
| ④全く良くなかった | 0名 (0%) |



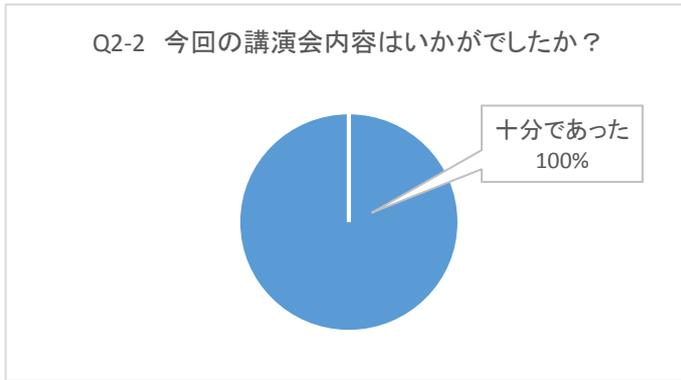
Q2-1 講演時間はいかがでしたか?

- | | |
|---------|-----------|
| ①長い | 8名 (21%) |
| ②ちょうどよい | 31名 (79%) |
| ③短い | 0名 (0%) |



Q2-2 講演内容はいかがでしたか。

- ①十分であった 39名 (100%)
- ②不十分であった 0名 (0%)

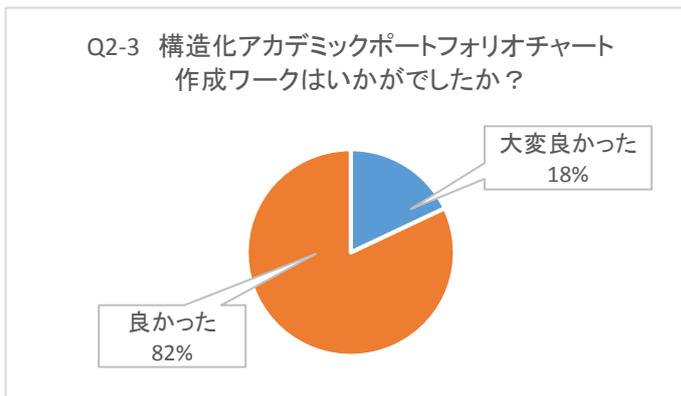


* 不十分であったと感じられた部分についてお聞かせ下さい。

今回はほとんど講演がなかったので、具体的にポイントを挙げられません。
 内容は良いがもう少し時間を短くして頂きたい。FDに参加する心理的負担が大きすぎる。
 「ポートフォリオ」という意味が分からずスタートしたこと。

Q2-3 構造化アカデミック・ポートフォリオチャート作成ワークはいかがでしたか？

- ①大変良かった 7名 (18%)
- ②良かった 32名 (82%)
- ③良くなかった 0名 (0%)
- ④全く良くなかった 0名 (0%)



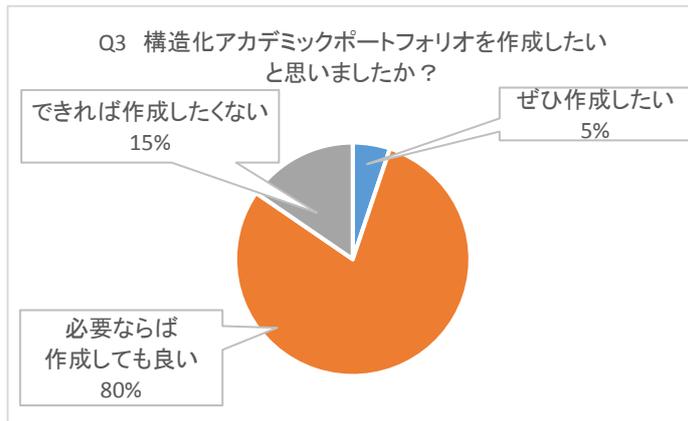
* 上記のように答えた理由についてお聞かせ下さい。

自分の振り返りはできた。ポートフォリオチャートが何か分かった。
 省察に用いることができた。各項目の説明→Work、となっていたため、書籍を読みながら実施するより対応がしやすかった。
 自分の研究・教育・サービスを見直す良い機会となったから。
 時間が十分に取られており、考えをまとめつつ、他学部の先生方の話も聞けて非常に良い刺激になった。非常に恵まれた環境であることを再認識できたことも良かったと思う。
 実際の構造化アカデミック・ポートフォリオチャートについて理解できたと思う。最後にジグソー法で他班のメンバーの発表を聞き、抜けている点にも気付けた。

一つ一つ説明が有って進めたので時間内に終わることができた。
SAPチャートを作ることで今後の研究・教育の指針を確認できた。また必要な時に再作成する手法(手順)も学べた。
自分の現状を整理することができた。
実際に作成してみて理解度が深まると考えるから。
教育、研究、サービスの関係性を考察する時間が持てた。
自身の活動を振り返る良い機会となった。
考えを文章化することが出来たから。文章化することで再考する必要があったので良かった。
自分自身あまり意識していなかった理念等が明確化できた。
ワークの時間はもう少し必要だったと思いますが、FD活動としてはこの程度でよいだろうと思います。あとは個人の興味で。
解りやすかった。
全体を俯瞰できるのは良い。もともと頭の中にあるもの以上のものは出てこなかった。
自己省察を明確に意識することができた。
時間が足りずリストしきれなかった。自身の活動を見つめる良い機会となった。
振り返り、整理、確認ができた。
研究・教育・サービスの3つの領域の重要性が再認識できた。
以前のもの(3年前)より解り易かった。
活動の整理が出来ました。
自身の振り返りが改めてできた。
自覚していない教育・研究に対する態度・姿勢が発見できた。
研究・教育・サービスをバランス良く日頃から考える必要があることが分かった。
自分自身の活動を整理できた。
日常考えることのない事を改めて思考したから。
教育と研究のバランス、自分の振り返りに役に立つ。
自分が今までにやってきたこと、やろうとしていることが可視化された。3つの柱の連関がより見えてきた。
自分の核になっている哲学的キーワードを改めて確認できたこと。そしてキーパーソンの存在が大きく、私も学生のそうした存在になれるよう頑張りたいと思いました。
活動が再認識できた。

Q3 アカデミック・ポートフォリオを作成したいと思いませんか？

- ①ぜひ作成してみたい 2名 (5%)
- ②必要ならば作成してもよい 31名 (79%)
- ③できれば作成したくない 6名 (15%)



Q4 アカデミック・ポートフォリオについてどのような印象を持たれましたか？

その可能性、限界、課題についてなど、ご自由にお書き下さい。

<p>実際の教員採用などでAPを求められることがまだ多くないので、それが増えてくれば早く普及すると思います。エビデンス作りのためのアンケートが増えると学生にとって負担が多いのでは。</p>
<p>作成することは自分の振り返り、確認、シェアして自分に足りない視点の気付きなどあり良いと思うが、それをどう利用するのか、利用する必要もないと思うので作成のタイミング、やり方など、工夫が必要かもしれない。(Webで作成など)</p>
<p>感想として、個々の独立事象と考えているものでも、関連性があることを認知させてくれる方法だと思いました。自己評価データを見ながら作成すればより詳細になると思いますが、逆に今回のように記憶にあるのだけで考えたほうが、より重要性のあるものになってよろしいのでしょうか、その辺りが気になりました。</p>
<p>研究、教育、サービスを結び付けることが出来る良いツールと思いました。今回作成したものを今後にどう活かすか(どう活かしたか)という所まで追っていきける(追加調査)と良いと思います。(やりっぱなしにならない様に)。</p>
<p>現状を理解する良いツールとなると思われる。問題点を解決する場合においても、多角的な手がかりとなると思う。ただ、抜本的に解決するかどうかについては、その効果はよく分からないが参考になると思う。</p>
<p>課題や現状整理に役立つと思うが。慣れるまで時間が掛かりそう。作業時間と効果に疑問あり。</p>
<p>大学教員としての仕事を整理するためには有効な方法であると感じた。それぞれの教員の個性が分かり、多様な教育ができるのが奇跡できた。</p>
<p>自分自身の置かれている現状を再認識することができた。</p>
<p>自らの立ち位置や指針(教育・研究、社会貢献)を再認識する上で有効。他の人との情報交換にも役立つ。</p>
<p>作成に際して必要な時間がどの程度なのか？少し大変そうなイメージを持ちました。意義のあるものだと感じました。</p>
<p>いずれ、いつかやらねば思いながらも機会がないとやらないものとのイメージだが、やってみると楽ではないが終わってみると良かった。役に立ったと感じた。</p>
<p>自分の考え方や今までの業績を整理する上では非常に良かったと思う。より完成度の高いプロダクトを作成するためには、繰り返し行なうことも必要だと感じた。</p>
<p>自己の教育・研究活動の振り返りに有用であると思ったが、その作成には時間が掛かると感じました。</p>
<p>自己評価等で業績や教育に関することを入力しているので、これを利用して、マクロでSAPチャートが作成できるのではと思った。</p>
<p>もう少し若い時期にこのような経験をすることが出来れば良かった。WSでは時間が短い場合もあったので文章化にももう少し時間があっても良いかと思った。</p>

自身の振り返りや今後の活動方針、キャリアパスの設計には有用だと感じたが、他人から評価されることを意識すると素直に書けないこともあると感じた。
短時間でなく、継続的に行ない続けると真の業績評価として使えるのではないかと思います。単発ではなく、繰り返し行なうことで成長が自覚できるポートフォリオができると良いと思います。
各自の活動を整理する目的には良いが、これにより新しい方針が出てくることはあまり期待できない。
研究に関して、もっと細分化したものがあれば研究に役立つと感じました。
自己の活動における理念を認識するためには有用である
若手教員には自己の省察の非常に良い機会となるのではないかと感じた。エビデンスを残す方法について、シェアできる場所・例をまとめたものがあると参考になると思います。
毎年、自己評価書・実績報告書を作成しているが労力が掛かるばかりで全く活用されていない。アカデミックポートフォリオがCV(履歴書)の一部として利用できるなら作成しても良い。
時代背景もあるため、定期的な作成が必要、と考えると大変さを覚えた。若手教員に対してもこのFDを実施すべきと思います。
一度は作ってみると良いかもしれない。時間が掛かりそう。
プロモーションや就職に直接使用するようになれば普及すると思うが、時間が掛かるので普段の生活で作っていくのは難しい。
本人にとっては悪いことではないが、学生教育にどのような利点があるのか。効果をどの様に客観的に評価できるかは疑問である。
時間が掛かりそうな印象を受けた。これを作成することで今後将来的にどのような価値ある変化が生じるか、あまり良くイメージできない。
各教員が研究・教育・サービスを統合的に理解することで、それぞれに対する教員のモチベーションが上がるのでは、という可能性を感じました。これはひいては、学部、大学の質向上に貢献するのではと思いました。
今に自分の立場、これまでの経過などを自分と向き合いながら考えることができる。また他の先生方のルーツも辿ることができる。
物として資料が残るものについては良いが、学生の指導など、記録が残しがたいものや、プライバシーに関わるものをどのように使用するのかについては困難さを感じた。
本格的に作るには時間が掛かり(おそらく何年間かに書き換えが必要?)、ポートフォリオの価値とそれ以外の価値(実際の教育や研究)を考えると現実的ではないように思える。
普段から頭の中では行なっている作業です。これがどう生かせるか分かりませんでした。文章で整理することで何かが変わるのか知りたい。
作成意義は理解できましたが、作成はとても大変だと思います。
ポートフォリオとして、活用方法が難しい。ポートフォリオは継続して修正するために活用することが必要と思うので活用方法とその成果が難しいと思う。
何十ページも作成したアカデミック・ポートフォリオを他人はきちんと読んでくれるのだろうか。退官記念業績集のようにこれまでの人生の集大成記録としては良いのかも。
個人の振り返り、キャリアを整理するツールとしては活用できると思います。ただ、大学という組織に向けてAPを使うにはいくつかの工夫が必要でしょう。
若い教員が作成することが望ましいと思います。

以上

『終わりに』

FD 実施委員会 委員長
高橋 勇二

教員の資質は、大学における教育の質を決定的に左右する。この教員の資質を高めるというのが FD 活動の目的である。東京薬科大学 FD 実施委員会が主催する FD(Faculty Development) WS (Work Shop)は毎年ほぼ 1 回開催され、今回で第 6 回目になる。

本学 FD-WS の目的はいくつかあげることができる。第一に、薬学部と生命科学部、両学部の教員間、そして、職員を加えた教職員の相互理解を深めることがある。両学部の教員は、顔をあわせることがあっても、話をする機会は少ない。話をする機会があっても、教育論を議論する機会はほとんど皆無である。WS では、教育論を交わす濃密な時間を共有する事、共同作業を行う事で、質の高い同僚意識の形成を目指している。

第二の目的は、大学教育論の最新の理論に触れ、大学教育方針を常に検証する事である。教育学とりわけ成人教育理論や大学教育論の進歩は著しい。今回、1 日目に、大学基準協会の蔦美和子氏から、「新・大学評価システムの概要（大学基準、評価体制、評価のプロセス）」という第 3 期認証評価のポイントと内部質保証システムの有効性に着目する評価について講演がなされた。そして、2 日目には、東京大学 大学総合教育研究センター栗田佳代子氏と大学院総合文化研究科・教養学部の吉田塁氏による構造化アカデミック・ポートフォリオについての講演をいただき、大学教員として責任を担う、教育・研究・サービスについて自己省察を行うことの重要性とその方法を学んだ。

第三の目的は、教育方法の中でも SGD (Small Group Discussion) を参加教員が体験することである。教員がその教育方法を変えようとする際には大きな障壁がある。その障壁の最大のもは、教員自身が受けてきた教育と教育方法の呪縛である。大学教育課程を変えようとするという事は、すなわち現教員は教育課程変更前の教育しか受けていないことを意味している。本 WS では、成人教育において様々な長所を持つとともに、実施体験なしにはその意義も方法も理解しにくい SGD の実体験を得ることが第三の目的である。

本学 WS は、日本における薬学教育改革を主導するお二人（笹津学長、大野教授）のもとで、開始され回を重ねて来た。教育の成果が「学習者の行動に価値のある変化をもたらすプロセスである」と定義するならば、本 FD-WS が学習者である参加教員の行動に価値のある変化をもたらした事は、参加者の各報告を見れば間違いが無い。そういう意味で、大変有意義な WS であったと言える。タスクフォース、事務局各位および積極的に参加した参加者各位に感謝し、敬意を表する。

平成 29 年 10 月